

【ポスター発表】

ソーシャルワークにおける「身体」の位置づけに関する考察 —「インペアメント文化」概念を通して—

○明関西学院大学 松岡克尚 (01808)

原順子 (四天王寺大学・001134)、宮崎康支 (関西学院大学大学院・009599)

キーワード：身体、ソーシャルワーク、インペアメント文化、バルネラビリティ

1. 研究目的

本発表では、「ソーシャルワークの立場から、『身体』を語ることはどういうことか？ またそれは何のために必要なのか？」という問いに対して、「インペアメント文化」概念を軸にすることでその解を論じる。ソーシャルワーク理論において中核的な位置を占める“Person-In-Environment”視点では、身体（Body）は“Person”の重要な構成要素になる。しかし、身体は“Mind”と切り離され、医学モデル・個人責任論に傾斜することへの警戒から、従前において言及されることが乏しかった。

そこで、本研究では後述するインペアメント文化の概念を通して、ソーシャルワーク理論の中での身体の位置づけを試論的に探ってみた。換言すれば、インペアメント文化という概念がソーシャルワークの身体論に果たし得る貢献とは何か、についての考察となる。

2. 研究の視点および方法

文献研究を行った。先行研究レビューで注目すべきは「バルネラビリティ論」であろう。承知のように、「ソーシャルワークのグローバル定義」(2014)において「脆弱 (vulnerable) で抑圧された人々を解放」することがソーシャルワークの努力目標とされていることからその重要性が示唆され得る。日本では、一般サービスとは異なる社会的ケア利用者の特質を説明すべく、古川孝順 (2006) によって「社会的バルネラビリティ論」が提唱され、次第に注目されるようになった。当然、漸弱ということは身体上のそれも含まれてくるのであり、それゆえに「バルネラビリティ論」における身体の扱いをレビューしてみると、ソーシャルワークの身体論についての示唆もそこから得られるものと思われた。

加えて、Cameron & McDermott による“Social Work and The Body” (2007) はソーシャルワークの身体論を論じた数少ない文献であり、本研究テーマにとって同書を紐解くことは欠かせない。またマクロ面（政策）では、論文題目に“Body”を冠する Twigg (2002) の論文も外すことはできない。以上の先行研究レビューを経て、従前のソーシャルワークが身体をどう扱ってきたか、また如何なる課題があるかを浮き彫りにした。

その上で、インペアメント文化という考え方がソーシャルワークの身体論で如何なる可能性を持ち得るのかについて検討した。なおインペアメント文化とは、インペアメントを持った身体（障害者）による生存戦略／環境適応のスタイルを意味する（松岡 2018）。

3. 倫理的配慮

「日本社会福祉学会研究倫理規程」及び左に基づく「研究ガイドライン」を遵守して研究を行った。なお、本研究は科研費 16KO04224（研究代表：松岡克尚）の助成を受けた。

4. 研究結果

社会学ではそれまで「残余」とされてきた身体について、「社会的な観点から『身体』を語ることは可能なのか？またそうすることに、果たして意味があるのか？」（後藤 2006:94）という問いに応えるべく身体社会学の理論が展開されてきた。こうした身体社会学の議論はソーシャルワークが日常の実践で出会う様々な現象と同種であるという指摘がある（Cameron & McDermott, 2007）。言い換えれば、身体を巡る社会学と同じ問いがソーシャルワークにおいても成立し得るのであり、かつそれに対して学としての固有性を持った回答を導き出す努力が求められるともいえる。そこから、ソーシャルワークにおける身体論に、ソーシャルワークの固有性を見いだせる可能性があることが確認できた。

次にバルネラビリティ論においては、脆弱性を人間にとって普遍的な性質であることを受容しつつ、身体、心理と社会のそれを区別する必要性が強調されており、身体的バルネラビリティ、すなわち身体をソーシャルワークの埒外に置く従前の発想がそこに垣間見られた。一方で Cameron & McDermott は、そうしたソーシャルワークのあり方を批判し、“The Body Cognizant Social Worker” を提唱し、Twigg もソーシャルポリシーにおける身体への着目の可能性を論じていた。そして、インペアメント文化という視点は Cameron & McDermott がいう “Corporeal capability” に相当するものとして考えた。

5. 考察

インペアメント文化とは、身体と環境との相互作用という視点を包摂した概念であり、それは “Person-In-Environment” の具体的な表現として把握できるものと考えられた。身体を用いて環境に適用していくその様式やその影響こそが、身体のソーシャルワークによって分析され、支援に活用する対象であること、インペアメント文化がソーシャルワークの身体論の発展につながる可能性が示唆された。

【文献】

Cameron, N. & McDermott, F. (2007) *Social Work and The Body*, Palgrave Macmillan.

松岡克尚 (2018) 「インペアメント文化のとらえ方とその可視化：障害文化、障害者文化との比較を通して」 *Human Welfare*, 10(1): 79-91.

後藤吉彦 (2006) 「身体社会学の可能性: 人間の「傷つきやすさ」に根ざした理論の構築」 『ソシオロジ』 50 (3)、93-108.

古川孝順 (2006) 「格差・不平等社会と社会福祉-多様な生活困難への対応」 『社会福祉研究』 97、15-24.

Twigg, J. (2002) "The Body in Social Policy: Mapping a Territory," *Journal of Social Policy* 31(3)、421-439.